

## 中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習

藤井康子(大分大学 教育学部 准教授)

### 1. 研究の背景と目的

人工知能の進化と普及は、今ある職業や価値観に変革をもたらすとされ、従来の知識伝達型学習ではなく、各教科での学びの関連付けや統合する方法を見出す力を育成する教科融合型学習の展開が学校現場で求められている。大分県においても、グローバル社会を生きるために必要な「総合力の育成」に力を注いでいる。研究実践校では、生徒の学習意欲が低く、特に本研究の中心となる美術科と国語科に共通する課題として「自分のイメージや考えを言葉で表現するための語彙力の乏しさ」に課題がある。本研究では、中学校美術科と国語科を中心に「地域の色」をテーマとした探究的な学びの中で各教科が融合し合う、アートと言葉を使った教科融合型学習を開発することが目的である。

### 2. 研究方法及び研究体制

研究実践校の2年生91名(平成29年4月1日)を対象に、美術科と国語科等において現場教員と指導主事(国語科)らと共に教材開発を行った。アートから始まる学びを通して、美術教育が国語科の「書く力」の根幹である語彙力の向上にどのように影響を与えるか、教育実践を通して学習プロセスの分析を行った。

研究体制としては、大分大学・大分県芸術文化スポーツ振興財団(大分県立美術館)、津久見市教育委員会、実践校等による「津久見プロジェクト」を組織し、研究を推進した。「網代島巡見」「移動美術館」の開催には、「地域の色・自分の色」実行委員会(大分県芸術文化スポーツ振興財団に事務局を置く)からの支援も受けて行った。

### 3. 研究結果・成果

津久見市出身の作家作品の鑑賞を起点として、地域の鉱物を使って顔料をつくる取り組み、色名の創作、色辞典の編集といった色をテーマとする探究学習を開発した。開発したプログラム及び、その結果は、以下の通りである。

- (1)「その絵・・・どんな絵?」: 導入に、アンラーン(学びほぐし)として実施した。美術作品を、見ていない人にもどう伝えるか、という課題を通して、視覚イメージを言語化する面白さと難しさを体験した。
  - (2)「サイエンスレクチャー網代島巡見」: 地域の自然である網代島で、観察・スケッチ等を行った。地質の専門家を招聘し、赤系、黒系、緑系など、多様な色彩のチャート(鉱物)の成り立ちや大地の働きについて学んだ。
  - (3)「津久見の色をつくる」: 網代島で採取した鉱物を砕いて粉末にして、顔料をつくった。天然の鉱物から手作りで作られた色の美しさが、色への関心を高めた。
  - (4)色名の創作: 津久見の魅力を発信することを目的に、伝統色の名前なども活用して色名を考案した。
  - (5)「津久見色辞典」: 色サンプル(色名とその由来)、スケッチ、鉱物の写真などで構成した色辞典を制作した。天然鉱物の色味や風合いを活かし、友人と色を分け合い混ぜたりして、色の再現を行う姿が見られた。
  - (6)「移動美術館」: 大分県立美術館の所蔵作品26点を、体育館に展示し、1日学芸員となった。来館者に対して、自分なりの見方・考え方を発信し、作品を通して来館者と生き生きと語り合う姿が見られた。
  - (7)「鑑賞文を書こう」: 地域作家である南壽敏夫作「朝」(津久見市所蔵)を教室に運び、国語と美術のTTで鑑賞した。造形的に捉える視点と分析的に捉えて言語化する視点から、鑑賞文を書いた。
  - (8)「アートと言葉新聞」: 新聞記者をGTとして招聘し、読み手を意識した文章、見出しの役割などを学んだ。
  - (9)「その絵・・・どんな絵?」: 終末に、取組のまとめとして実施した。(1)と同様に見ていない人にどう伝えるか、という視点から取り組んだ。(1)では視覚情報の言語化が優位だったが、(8)では非視覚情報が優位となった。
- ※美術と国語の自己評価ルーブリックによる検証を通して、移動美術館前に比べ実施後では、学びに向かう力が向上し、語彙力においては、非視覚情報が優位となるなど、質的に向上する結果となった。

### 4. 今後の課題

伝統色や鑑賞文に必要な語彙など、新たに学んだ言葉の活用に課題がある。「地域の色」から言葉を生み出す視点を重視し、生徒の生み出す言葉と、美的な体験の深まりとの因果関係に着目した分析を続ける。

開発プログラムを教育課程にどう位置付け、持続可能な取組とするか。

美術科と国語科からのルーブリックに加え、融合された内容に係るルーブリックの開発が課題である。

共同研究者: 木村典之(大分県教育委員会)